

# 接続助詞「けど」の音調と意味用法に関する予備的考察

田頭 未希 (東海大学 教養教育センター) †

## A Preliminary Study about Tone and Discourse Function of *Kedo*

Miki Tagashira (Foreign Language Center, Tokai University)

### 1. はじめに

田頭(谷口) (2012a, b)では、話し言葉にみられる接続助詞「が」について、句末音調とその意味・用法について分析し、「言いさし」の用法では下降調、「談話主題の提示」の用法では上昇調となることが比較的多いこと、また一方で、特定の音調と用法が一对一で強く結びついているわけではなく、むしろ話し言葉では句末音調と意味・用法はある程度幅をもって対応していることを述べた。さらに、接続助詞「が」は語彙情報としては下降調をとるが、松永(2002)が指摘している「韻律句末の音調はイントネーションによって影響を受けやすいので注意が必要である」という見解を、量的分析により明らかにした。話し言葉では、句末は上昇調や上昇下降調などの音調変化を伴う方が一般的で自然であるといえる。

本稿では、接続助詞「が」とほぼ同じ意味・用法を持ち、「が」と同様に話し言葉において頻繁に使用される接続助詞「けど」「けれど」「けども」「けれども」<sup>1</sup>を取り上げ、その音調と意味・用法の関係について考察する。

### 2. 目的

本研究の大きな目的は、日本語の話し言葉について韻律句末の音調と句末に表れるそれぞれの品詞の意味・用法との対応関係を体系的に記述することである。本稿では接続助詞「けど」類に注目する。

接続助詞「けど」類を扱う理由は以下である。まず、文末のイントネーションを扱った研究に比べ、いわゆる発話途中とみられる場所のイントネーションとその意味・用法・機能などとの関連を扱った研究が少ない。また、接続助詞はその本来の機能から発話末にも発話途中にも表れる品詞であるため、同じ品詞で同時に2つの生起位置の音調と意味・用法の関係をみることができると考えられる。田頭(谷口) (2012a, 2012b)で扱った「が」と同様に、複数の意味・用法を持つこと、さらに動詞や形容詞などに後続した場合、語彙情報としては「けど」類の内部では音調変化を伴わないことがあげられる。また一方で、「が」とは異なり2モーラ以上から構成された語で、実際の話し言葉ではその内部で音調変化を伴うバリエーションが「が」よりも多いと予測でき、もしバリエーションがあれば韻律句末の音調変化の現れ方の比較ができると考えられる。

---

† t-miki@tokai-u.jp

<sup>1</sup> 本稿では、接続助詞「けど」「けれど」「けども」「けれども」はそれぞれ異形態であるが、同じ意味・用法を持つ一つの形式と考える。本稿中に書かれている形態は基本的に他の3つのいずれに入れ替えて読んでも意味は変わらない。「けど」「けれど」「けども」「けれども」を合わせて言うときには「けど」類という表現を用いることにする。

### 3. 分析データ

#### 3.1 音声資料

『日本語話し言葉コーパス』(以下 CSJ) (Maekawa 2003<sup>2</sup>) のコアデータのうち、韻律情報が付与されている約 18 時間分 (模擬講演 107 ファイル) を分析資料とした。

#### 3.2 韻律句末の音調

本稿での「韻律句」の意味を定義しておく。イントネーションの物理的変化量として基本周波数を考え、時間軸に沿って示される音調の変化のうち、冒頭の上昇から始まり発話末にかけて下がっていく基本周波数で示されるひとつの山のまとまりを「韻律句」と呼ぶ (Pierrehumbert and Beckman 1988)。韻律句には Intonation Phrase<sup>3</sup> (以下 IP) と Accentual Phrase (以下 AP) の 2 つがある。音調の連鎖という意味では、東京方言では、ひとつのアクセント句は、「相対的に低いピッチ (%L) で始まった後すぐに上昇し (H-)、アクセント核<sup>4</sup>があればそこで下降し (H\*+L)、最後もまた低く終わる (L%)」という基本周波数の一連の変化からなる (五十嵐他 2008)。

CSJ では X-J\_ToBI と呼ばれる韻律ラベリングシステムを採用し、韻律句末の音調の型として 5 つの型を定義している。下降調 (L%)、上昇調 (H%)、上昇下降調 (HL%)、低ピッチ区間を伴う上昇調 (LH%)、上昇下降上昇調<sup>5</sup> (HLH%) である。

### 4. 接続助詞「けど」類

#### 4.1 音調の型

『明解日本語アクセント辞典』(1997) によると、接続助詞「けど」類について語彙的に与えられている音調は「け」から「ど」にかけてアクセントを持つが、基本的には「けど」類単独で使用されることは少なく、動詞や形容詞、名詞に後続して用いられるため、次のように説明できる<sup>6</sup>。形容詞の場合も以下の説明の動詞の場合と同様に、起伏式形容詞の場合には形容詞の型を変えないで低く下がってつき、平板式形容詞の場合には最後の拍を変え、低く下がってつく<sup>7</sup>。ここでは便宜上、前接要素と比べ、低く下がる音のみを下線付きで表記する。

平板式動詞につく場合：助詞の第一拍から、低く下がってつく  
例) なくけど (泣くけど)

<sup>2</sup> CSJ の概要について説明している論文のひとつである。

<sup>3</sup> Pierrehumbert and Beckman (1988) ではアクセント句より階層的に上位の単位として中間句 (Intermediate Phrase) と発話 (Utterance) を置くが、J\_ToBI ではそれらを融合した単位としてイントネーション句 (Intonation Phrase) を定めている。

<sup>4</sup> 語彙的に指定されたアクセントを意味する。なお、この注釈は筆者が加筆したもので、五十嵐他(2008)は本文カギ括弧の表現である。%L、H-、H\*+L などは CSJ で採用されている韻律ラベリング X-JToBI で使われる記号である。

<sup>5</sup> 本稿での分析データでは、上昇下降上昇調は全接続助詞 9,518 例のうちわずか 2 例であり、いずれも「て」の例であったため、今回の分析には含まれていない。

<sup>6</sup> 「新明解日本語アクセント辞典」(秋永 2002) の付録(72)~(74)の表より。まとめは筆者による。韻律句末の音調は、語彙情報として指定された以外の一般的音調以外に特に助詞などの類はイントネーションによって変化しやすいので注意が必要である点が明記されている (秋永 2002)。

<sup>7</sup> 平板式形容詞の場合は、形容詞の最後の拍を低く変え、低く下がってつく。

起伏式動詞につく場合：動詞の型を変えないで、低く下がってつく  
例) よむけど (読むけど)

上記の例に示した通り、「けど」類が動詞や形容詞などに後続する場合、語彙情報として持っている音調は、前接要素の品詞やアクセント型に関わらず、前接要素に続いて低く下がってつく下降調である。

## 4.2 用法

接続助詞「けど」類は先行研究<sup>8</sup>により次のような用法<sup>9</sup>を持つことが指摘されている(森田 1980, 渡辺 2000, 永田・大浜 2001 他)。例は (a) 先行研究からの引用、または筆者による作例と (b) CSJ から取り出した例(鍵括弧にデータの Talk ID) を示す。(当該要素の太字表記、句読点位置と推定される箇所でのスペースは CSJ の転記にて分かち書きされた箇所を示す。)

- (1) 談話主題の導入：話題の移行、主題の提示する。
  - (a) お借りした本ですけど とても面白かったです
  - (b) えーっと まず 中学三年の ま 高校入試の 頃に ちょっと 遡るんですけど その時は まー[S00M0065]
- (2) 逆接・対比：前出の文脈と相反する事項を述べる。統語的には取り立ての「は」「も」が用いられることや対照的な叙述が表現される。
  - (a) あの映画は 前半は面白かったけど 後半は退屈した  
雨が降ったけど 運動会は行われた(永田・大浜 2001 より)
  - (b) 普通だったら その 立ち入り禁止区間を 入ったところにお咎めの 言葉 一言ぐらい 言うと思っんですけど それも 全く 言わずに[S01F0183]
- (3) 並列・累加：二つの事柄を並べる。
  - (a) 彼は 走るのも速いけど 泳ぐのもうまい
  - (b) 凄く 頭が 良くて で 凄い おとなしいんですけど 超面白い 感じ で[S02F0094]
- (4) 挿入：補足説明を付け加える。「けど」節がなくても、前後の文意が通じる。
  - (a) この前貸した本を明日 もし無理だったら明後日でもいいんだけど 返してくれる？(永田・大浜 2001)
  - (b) そんな ことも ありましたし 娘と 二人で 毎日 あの 猫のこと 書いて あのー 夏目漱石じゃないけど あのー 猫の小説でも書けると いいねなんて[S01F1522]
- (5) 前置き：後続する事項を補足したり、後件の解釈を阻害する要因を排除す

<sup>8</sup> 「けれども」の用法を4つに分類するもの(三枝 2007)、6つに分類するもの(森田 1980, 永田・大浜 2001)など研究者によって必ずしも一致しているわけではなく、また分類された用法の語も少しずつ異なっていることに注意が必要である。本稿では森田や永田らの研究に用いられている分類を基に、「逆接」と「対比」の分類には曖昧な場合がある(渡部 2000)を反映させ、6つの用法に分類した。

<sup>9</sup> 定義は、のものを筆者により短くまとめている。例は永田・大浜(2001)より。

るために置く。「挿入」との違いは、「前置き」は「けど」節が前後の文意を理解するために必要である点、「談話主題の導入」との違いは、「談話主題の導入」がそれ以前までの話題との関係性の有無であるのに対し、「前置き」は「けど」節と後続節との関連が重要であるといえる。

(a) ちょっと M さんにききたいんですけどね 要するに いま この少年法の議論になってる ま いろんな あのー 驚くような事件ですよ ね その事件が頻発してくると 何か社会はおかしいんじゃないかとあの・・・(永田・大浜 2001)

(b) まず 理系は 全部 却下という 形に なってますので 文系で 考えて それで 今度は 経済学部とか ありますけど これは やっぱり うん 経済だから 計算を するんだろうと やっぱり 算数が 出てくるんじゃないかと[S01M0225]

(6) 言い切りの回避・言いさし：話し手の主張を弱める働きをする。対話では次に会話が続くことを話し手が意識しているサインとして働く。または、最後まで述べずに、話題が他のことへと移行してしまうような場合もある。

(a) あの人とはとてもいい方だと思いますけど

(b) 面白い 授業で それで 何とか 続けてこれた 面も あるのかなと で 歴史は あんまり 得意じゃなかったから きっとそれが 良かったんじゃないかと 思うんですけど で まー そうやって 予備校に 通っていて で [S01M0225]

模擬講演データにみられた接続助詞「けど」類の例を上記 6 つの用法に分類することを試みた。当該要素の前後の転記、時間にして数秒から数十秒間に相当する箇所を読み、前後の文脈から筆者が判断し分類<sup>10</sup>を行った。

## 5. 結果

分析データ全体では接続助詞「けど」は 1937 例あった。そのうちランダムに約半数を抽出し、1019 例について用法の分類を試みた。従ってこれが本稿での分析データ総数である。内訳を表 1 に示す。形態としては「けれども」「けど」の使用頻度が多いことが分かる。その他としては、「け」「げ」「けお」「けよ」「けれども」「けろ」が含まれる。1019 例のうち、4.2 節で示した用法の分類において、判断に迷ったものが 45 例あった。その 45 例を除いた 974 例をもとに以下の分析結果と考察を行うことにする。

974 例の句末音調の割合の分布を表 2 に示す。全体としては、HL、つまり上昇下降調が約半数を占めている。韻律句末の音調変化は、前接要素のアクセントの位置と句末までの距離が関係している可能性が高いため、「けど」類を構成モーラ数<sup>11</sup>で分け(表 3)、句末音調との関係を調べた。結果を表 4<sup>12</sup>に示す。Hつまり上昇調は 4 モーラの場合に特徴的に多く、Lつまり下降調は 4 モーラで特徴的に少ないといえる。句末音調の型は韻律句末からの距離が影響している点が指摘できる。

次に用法について考える。用法別の例数を表 5 に示す。用法として最も頻度が高かった

<sup>10</sup> 分類に関して、判断に迷ったものや判断できなかったものについては、今回の分析ではすべて除外した。

<sup>11</sup> CSJ の転記が、長音表記になっているものは長音も 1 モーラと数え、分類した。「けーども」は 4 モーラ、「けーど」は 3 モーラに分類する。

<sup>12</sup> 「け」などの 1 モーラの 3 例と、LHL の音調の型 4 例は分割表には入っていない。

表1 分析データの内訳

	けれども	けーども	けども	けれど	けーど	けど	その他	全体
データ全体	708	148	370	44	6	644	17	1937
分析データ	414	88	179	13	5	313	7	1019

表2 句末音調別の例数

	度数
L	202 (21%)
HL	451 (46%)
H	317 (33%)
LHL	4 (0%)
合計	974

表3 モーラ数別の例数

	度数
4モーラ	471 (49%)
3モーラ	190 (20%)
2モーラ	310 (32%)
1モーラ	3 (0%)
合計	974

表4 「けど」類構成モーラ数と音調

度数 列% 行%				
	H	HL	L	
2モーラ	82	148	79	309
	25.87	32.82	39.70	
	26.54	47.90	25.57	
3モーラ	50	89	49	188
	15.77	19.73	24.62	
	26.60	47.34	26.06	
4モーラ	185	214	71	470
	58.36	47.45	35.68	
	39.36	45.53	15.11	
	317	451	199	967

表5 用法別の例数

	度数
並列・累加	11 (1%)
談話主題の導入	71 (7%)
挿入	510 (52%)
前置き	78 (8%)
言い切りの回避	28 (3%)
逆接・対比	276 (28%)
合計	974

のは「挿入」の用法で、用例の約半数をしめていた。次が「逆接・対比」の用法で、この2つの用法で約8割ということになる。表6は句末音調と用法の関係を示す。いずれの用法も上昇調や上昇下降調となる割合が、下降調よりも高い。「逆接・対比」、「前置き」、「挿入」、「談話主題の導入」、「並列・累加」の用法では上昇下降調が高く、特に、「談話主題の導入」では6割がこの音調をとっている。また用例数は少ないが、「言い切りの回避」の用法では上昇調が高いことが分かる。さらに、どの用法でどの形態が使われやすいのかについては、「談話主題の導入」の場合には「けれども」の使用が半数以上を占め、また「累加・並列」

では「けども」と「けれども」で8割以上を占めているのが特徴としてあげられる。それ以外の用法では「けども」「けれども」に「けど」が加わり、3つの形態が使用されていることが分かる。

## 6. 考察

表1に「けど」類の形態の使用頻度を示したが、もちろん話者によっては「けれども」の使用が圧倒的に他の形態よりも多い人もいれば、「けど」の使用頻度が高い人もおり、話者のくせがはっきりと現れている人がみられる。一方で、例えば「談話主題の導入」の場合には「けれども」を必ず使用するというように、用法と形態にある程度の決まりのようなものを持って話している話者もみられた。

音調に関しては、上昇下降調の頻度が高かったが、それにはいくつか理由が考えられる。まず、「けど」の場合、もともと「け」から「ど」にかけての下降を語彙情報として持って

表6 用法と音調

度数 列% 行%	H	HL	L	
<b>逆接・対比</b>	87 27.44 31.52	134 29.71 48.55	55 27.23 19.93	276
<b>言い切りの回避</b>	14 4.42 50.00	8 1.77 28.57	6 2.97 21.43	28
<b>前置き</b>	28 8.83 36.36	35 7.76 45.45	14 6.93 18.18	77
<b>挿入</b>	164 51.74 32.28	226 50.11 44.49	118 58.42 23.23	508
<b>談話主題の導入</b>	20 6.31 28.57	43 9.53 61.43	7 3.47 10.00	70
<b>並列・累加</b>	4 1.26 36.36	5 1.11 45.45	2 0.99 18.18	11
	317	451	202	970

いる。また、この上昇下降調には韻律句末の2モーラにまたがったの上昇下降と、句末の最終モーラ内での上昇下降も含まれ、バリエーションが多いことも上げられる。「けど」類は最大で4モーラの長さのものが前接要素について発話されることから、前接要素自体の長さやアクセントの位置などとの関係から韻律句末での語彙情報としての音調が顕在化されやすくなったと考えられる。「けれども」は「ど」と「も」の間でもアクセントのような下降をつけて発音される場合も考えられ、これらが上昇下降調の割合を高めている原因にあげられる。「けど」類と同様の意味・用法を持つ接続助詞「が」は圧倒的に上昇調をとる割合が高かった(田頭(谷口)2012b)点とも比較でき興味深いといえる。

用法については、「挿入の用法」が最も頻度が高かったが、「けど」類は他の接続助詞に比べ、節の結びつきに論理性が弱い点(三枝2007)が指摘されており、それゆえ「けど」類節がなくても文全体の意味には影響を与えない付け足し的な説明や挿入が話し言葉では多用されていると考えられる。また「言い切り回避用法」は、その使われ方として終助詞の「ね」や「よ」に似ており、文末についてモダリティに相当するような意味も担っているといえる。尾谷(2003)はこのような使われ方をする「けど」類を一種のポライトネスマーカーとしての機能を持つと指摘しているが、音声面からも上昇調を伴うことで、より丁寧さを加えているといえる。

用法と音調の関係については、ある特定の用法と音調が強く結びつき、この用法の場合にはこの音調をとるという関係性はみられない。ゆるやかな傾向として、例えば、「談話主題の導入」の場合には上昇下降調が用いられやすいなどを指摘することはできる。この傾向は接続助詞「が」でもみられた(田頭(谷口)2012a,b)。

類似の用法を持ちながら、音調とのゆるやかな対応関係には違いがみられる「けど」類と「が」の比較については今後の課題としたい。

## 7. まとめ

『日本語話し言葉コーパス』を利用し、接続助詞「けど」類の音調と意味・用法、それらの関係について分析を行った。接続助詞「が」と同様に、「けど」類でも話し言葉では上昇下降調や上昇調をとる頻度が高いことが量的分析より明らかになった。音調と意味・用法との関係については、「談話主題の導入」として「けど」類が使われた場合に上昇下降調が用いられやすいという傾向はみられたものの、全体として、音調と意味・用法はゆるやかに対応していることが指摘できる。

## 参考文献

- 秋永一枝(2002)「アクセント習得法則」『新明解日本語アクセント辞典』第二版、金田一春彦(監修)秋永一枝(編)、pp.1-99、三省堂
- 五十嵐陽介・菊池英明・前川喜久雄(2008)「韻律情報」『報告書 日本語話し言葉コーパス構築法』、([http://www.ninjal.ac.jp/products-k/katsudo/seika/corpus/csj\\_report/](http://www.ninjal.ac.jp/products-k/katsudo/seika/corpus/csj_report/)よりダウンロード可能)
- 尾谷昌則(2003) p「主体化に関する一考察：接続詞「けど」の場合」『日本認知言語学会論文集』第3巻、pp.85-95. ([http://www.i.hosei.ac.jp/odani/kedo\\_JCLA3.pdf](http://www.i.hosei.ac.jp/odani/kedo_JCLA3.pdf)よりダウンロード可能)
- 三枝令子(2007)「話し言葉における「が」「けど」類の用法」『一橋大学留学生センター紀要』10、pp.11-27
- 田頭(谷口)未希(2012a)「接続助詞「が」の音調と意味用法 - 『日本語話し言葉コーパス』の分析を通して -」第一回コーパス日本語学ワークショップ発表資料
- 永田良太・大浜るい子(2001)「接続助詞ケドの往訪問の関係について - 発話場面に着目し

- て-」『日本語教育』110、pp.62-71、日本語教育学会
- 森田良行（1980）『基礎日本語2 -意味と使い方-』、角川書店
- 渡辺学（2000）「逆接表現の記述と体系 ケド・ワリニ・クセニをめぐって」『現代日本語研究』7、大阪大学大学院
- Maekawa, K. (2003) Corpus of Spontaneous Japanese: Its design and evaluation. In *Proceedings of ISCA and IEEE workshop on Spontaneous Speech Processing and Recognition*. 5-8. Tokyo.
- Miki Tagashira-Taniguchi (2012b) *Tone and Function on /ga/ in Japanese*. Workshop on Innovation and Applications in Speech Technology (IAST) in Dublin
- Pierrehumbert, B. and M. Beckman (1988) *Japanese Tone Structure*. Cambridge, MA: MIT Press.